

奈良県文化会館

所 有 者 奈良県
設 計 者 株式会社 日建設計
施 工 者 株式会社 浅沼組
株式会社 尾田組
三和建设 株式会社



この文化会館の設計は昭和40年初頭、戦後近代建築の完成期に、隣接の奈良県庁舎の設計者でもある片山光生氏の基本設計、日建設計の実施設計・監理によって行われた。当時、風致地区内の近代建築について賛否両論の景観論争があったというが、大路の松並木から十分後退させた配置計画、もはや様式として定着した小幅板型枠によるコンクリート軸組みの構成、意を尽くした構造体のディテール、水平な低層屋根と塔屋の曲線の対比など、時を経て奈良の景観になったという当事者の主張が妥当と思われる建築である。

改修前、既にほぼ100%の利用率に加え、関西文化学術研究都市の建設、国際化に伴って、国際会議など情報発信機能の強化等の改修に踏切った英断は高く評価される。工事に伴う休館期間の最短化、ホワイエ、ホール、舞台、装備の改善、高度化など、リフォームの目的を明確化するための初期診断、基本設計用調査や、景観申請、文化財発掘調査など5年間に亘る準備と手順が、首尾一貫した成果をもたらしたと思われる。

撤去されたホワイエ大階段は、原設計の象徴的な部分であるが、現地審査当日の利用状況からも妥当な判断であったと思われる。ホワイエを広げるため中庭を縮小しているが、その代わりに印象的な坪庭を新設する周到的配慮も施されている。ホール内部の吉野杉の内装も、音響性能の向上対策と相俟って成功を収めている。

従来、掘割り状であった駐車場を地下化した結果、会館手前の橋掛かりは、大路から松並木をくぐる広々としたアプローチとなり、奈良のゆったりとした気分を新たに創出して大成功を収めている。受変電設備の容量アップと併せ不燃化を計るなど、見えないところの改善も行き届いている。

歴史建築の復元とならんで、近代建築もリフォームの時代に入り、ヨーロッパでは文化となっている改修が、日本でも手法の多様化を伴って定着しつつある事を強く感じさせる成果である。